# 梅崎春生全詩集

藪野直史編

# 死　床

文二甲二　梅崎春生

海綿の様に落魄に濕つた病床に
私は茫漠と横たはつて居る
窓の外に蟋蟀が鳴きむせぶ夜である
露をとらへた秋草を踏み分けて
近づいて來る跫音を私は聞く

窓には不安に戰く障子がある
一枚の紙をおす夜の重壓
東洋風な幻想の恐怖に
流木の如く押し流される私の意識
私は更に強い恐怖を感じる
私はグングンと上昇する體溫計の水銀を感じる
私はヌルヌルと分泌する皮膚面の殘滓を感じる
そして鬱積した闇黑を破つて
近づいて來る跫音を私は聞く

人つ子一人居ない此の病室に
私は紙のやうにふるへて居る
心に巣くふ死の恐怖と生の執着とに

何だか月が山に隱れる豫感がする
蟋蟀の聲も細つて來た樣だ

私は高熱に浮かされながら
山の端に沈む月光の最後の一條の
執着に狂奔する光景を幻想する

近づいて來る跫音を私は聞く
私は鈍くなつた脈搏を數へる
私は衰へ果てた四肢を撫でる
私は思ひ出に滿ちた生涯の影像を
頭の中にしつかり刻みつけて置かうと
淋しい悲しい努力に悶へる

益々近づいて來る跫音

終に窓一様に擴がる影　影　影
外面一ぱい荒れ狂う嵐の幻覺
鼠色の壁からしみ出る妖性の幻視
私は渾身の力で蒲團にしがみつく

遂に遂に窓を押し開いて躍り込む影――
私の意識の中で壁土がボロボロと散り落ちる
ぐらぐらとゆらめく此の病室の陰慘な風景よ
蒲團の上に跨つて私の咽喉を扼するもの
ああ慘々たる恐怖の中に
私の意識は墜ちる墜ちる――
果てし無き虚無の中に彈丸の如く墜落する

［やぶちゃん注：昭和八（一九三三）年七月二日第五高等学校龍南会発行『龍南』二二五号に所載された初出形。同号の詩篇の部巻頭で、次回に電子化する梅崎春生の詩篇「カラタチ」の詩も続いて載っている（この前には随筆が一本あるだけ）。

今回、底本は「熊本大学学術リポジトリ」内で発見した、同初出誌誌面画像「225-002.pdf」（ＰＤＦ／ファイルの拡張子で判るので以下ではこの注は略す）を視認して活字に起こした。この私の梅崎春生の詩篇の初出復元電子化は恐らく初めての試みと思われる（昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊「梅崎春生全集」第七巻所収の同詩篇は正字化され、歴史的仮名遣も現代仮名遣化されてしまっている）。

但し、次の三箇所は誤植と判断して、沖積舎版により、補正した。

第二連八行目

「そして鬱積した闇黒を破つて」→【初出】「そして鬱積した闇里を破つて」

第七連四行目

「私は渾身の力で蒲團にしがみつく」→【初出】「私は渾身の方で蒲團にしがみつく」

第八連一行目

「遂に遂に窓を押し開いて躍り込む影――」→【初出】「遂に遂に窓を押し開いて躍り込む影―」

前二者は「闇里」及び「方」では意味が通らないこと、三番目は同連の五行目のダッシュが二文字分であり、ここを一字分ダッシュとする有意な差異性は認められないと判断したことによる。なお、底本には一切のルビが入っていないことから、沖積舎版全集に入っている十二箇所に及ぶルビは全集編者によるものであることが判明した（当該全集には編者による適宜ルビ振りしたという注記記載はない）。この内では一箇所だけ、第七連二行目の「外面」に「とのも」とルビを振っていることに限っては、読みとしてそうあるべきことを肯んずることが出来、読みの振れを考えるならばあった方がよいものであるとは思った。

「文二甲二」は熊本の第五高等学校文科二年の甲類（選択外国語が英語）の二組（甲類中のクラス・ナンバー）の意であろう。梅崎春生は福島県修猷館中学校卒業後、福岡高校を受

験したが不合格で、翌年四月に第五高等学校に入学しているため、この時、既に満十八になっていた（春生は大正四（一九一五）年二月十五日生まれ）。但し、本篇には重い病床に臥している詩人の姿が描かれるが、梅崎春生の年譜、同年の日記その他を調べてみても、五高時代のこの時期にそのような入院をした事実を確認出来ない。但し、この年次の最後、三年進級時に落第して、二年次をダブってはいる。

『龍南』は明治二四（一八九一）年十一月二十六日の創刊（初期は『龍南会雑誌』か）の熊本第五高等学校の交友会誌。五高の英語教授であった夏目漱石を始めとして、厨川白村・下村湖人・犬養孝・大川周明・上林暁・木下順二などの後の錚々たる文学者が寄稿した。梅崎春生も昭和九年度には編集委員に名を連ねている。今回、「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により発行月日まで確認出来た。

なお、本詩篇が掲載された『龍南』当該誌の『編輯後記』をも「熊本大学学術リポジトリ」内の初出誌誌面画像「25-017.pdf」で現認出来るが、そこには『「死床」は此の人の作風がよく現れて居る』と『(中村)』なる人物の署名で書かれている（この人物は不詳。当該ファイルの書誌情報にも姓のみしか記されていない。ただ、同号に『文三甲三　中村信一』という人物の「塩魚の焼くるにほひ」という詩篇が載るが、これについてこの「中村」氏は『「塩魚の焼くる匂」題は何だか素晴らしいさうでつまらない』（「匂」はママ）と評しており、他の寸評に比して、ひどくそっけない。一つの推理であるが、このそっけなさは実は自分の詩であったからではあるまいか？」

# カラタチ

病身ヲ杖ニ托シテヨロメクハ
今日モカラタチノ葉青ミタル小路デアル

カラタチヲスリ拔ケル風ノ葉ズレハ
白々シキ傷心ノ音譜
空氣ヲチクチクト刺シ通ス鋭ドサニ
青ミタルカラダチノトゲノユラギツツ
　私ノクロズミ枯レタル肋骨ノ
　何時カハカク青ミテ
　春風ニ呼吸スル日ヲ思フ

私ハ歩キ出ス
蹌踉トカラタチノ垣根ニ沿ツテ

［やぶちゃん注：昭和八（一九三三）年七月二日第五高等学校龍南会発行『龍南』二二五号に所載された初出形。前掲の詩篇「死床」に続いて掲載されているため、「死床」の署名『文二甲二　梅崎春生』は省略されている。

底本は「熊本大学学術リポジトリ」内で発見した、同初出誌誌面画像「225-003.pdf」を視認して活字に起こした。

老婆心乍ら、「蹌踉」は「さうらう（そうろう）」で、足どりがふらつくさま、よろめくさまの意。

なお、全篇と同じく、本詩篇が掲載された『龍南』当該誌の『編輯後記』（「25-017.pdf」）で例の中村なる編集者が『「カラタチ」は割に好い』とのっけに記している（この中村氏は「死床」よりも、この「カラタチ」の方が気に入ったものと読める）。」

# 嵐

梅崎春生

目を上げると、今まで芝生に影を投げて居たにれの木が、藍一つ一つに濕氣を含み今は雲の影におされて、影は芝生の中に吸ひ込まれる。此の風は芝生の一本一本を搖り動かすのだらうか。風の意志は此の搖り動かされる芝生の様な俺の心にのぞみ、嵐を畏れながらもいらだち待つ心だ。庭にははたはたと洗濯物があふり、清潔な曹達の匂ひを大地にふり落す。雲足の速さは刻々にれの皮をかぎろはせ、俺の心は一枚の濡れた旗となる。嵐の豫感に今縁に立てば遠景をわたる風の意志は、遠景の樹々の屈服を強ひつつ。おお、にれの木は爭鬪の前の亢奮に我を忘れて葉をざわめかす。縁に立つて双手を伸し、嵐を望み待つ俺の心は、はたはたはたと聲をあげて手もふるふ程の緊張の中に今影の様に、嵐は大きな手を擴げて渡つて來る。

［やぶちゃん注：昭和八（一九三三）年十一月五日第五高等学校龍南会発行『龍南』二二六号に所載された初出形（発行日は「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により確認）。底本は「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像「226-005.pdf」を視認、活字に起こした。

沖積舎版とは一行字数が異なり（沖積舎版は二十字、初出は基本十九字で「強ひつつ。おお、これの木は争闘の前の亢奮」の行の句読点が表記のように半角化されている）、以下の句読点異同が見られる。

初出形二〜三行目

「藍一つ一つに濕氣を含み今は雲の影におされて、」

←（「含み」の後に読点を追加）

「藍一つ一つに湿気を含み、今は雲の影におされて、」

初出形終わりから四行目

「縁に立つて双手を伸し、嵐を望み待つ俺の心は、はたはたはたと聲をあげて手もふるふ程の緊張の中に今影の様に、嵐は大きな手を擴げて渡つて來る。」

←（「聲をあげて」の後に句点を、「緊張の中に」の後に読点を追加）

「縁に立って双手を伸し、嵐を望み待つ俺の心は、はたはたはたと声をあげて。手もふるふ程の緊張の中に、今影の様に、嵐は大きな手を擴げて渡って来る。」

前者はあった方がよいとは思うが、後者は如何か？　前の句点は、前の文脈の調性との対句構造とすれば、奇異ではあるものの、よしとするとして、後の読点は、果たして？　ここでよいか？　私が編者であり、敢えて読点を追加するとするなら、ここは、

「手もふるふ程の緊張の中に今、影の様に、嵐は大きな手を擴げて渡つて来る。」

或いは大胆にも、

「手もふるふ程の緊張の中に。今、影の様に、嵐は大きな手を擴げて渡つて来る。」

とするであろう。朗読して御覧になれば、私の焦燥の意味が解かるであろう。

なお、沖積舎版では「曹達」に「ソーダー」とルビを振るが、これも私はイケ好かないのだ。振るんなら、ここは――「ソーダ」――だろう!」

# 追　憶

大きな夾竹桃のある幼ない思い出の庭、

私はその土藏の壁に橙色のクレオンで素晴らしい船の畫を描いた。

橙色の二本の煙突からチロチロとはき出される橙色の煙、

橙色の鷗がはたはたと飛び交ふ橙色の波頭。

ああ午後の庭は目の痛い程明るい――。

遠くから來る響きのやうに私はスクリウの音を感じて居る。

あれは今日も夾竹桃の花をゆるがす風の音ででもあらうか。

今土藏を前にしてクレオンを握つて居るのは幼ない日の私である。

橙色の鷗のひそけきはばたき――遠い追憶の翼のそれ。

甲板をゆききする大男の船長の錆びたる靴のひびき、

マストに坐る小さな船員のあの異國めいた發音よ。

白い大洋への白き陽の光のたわむれ――さざめく潮の匂ひもして、

私は遠い遠い昔の事を長い水脈のように知り始めて居る。

私は裏庭の土蔵の壁畫に、

再びクレオンを握りしめて長い長い水脈をかきそへる。

さうして明るい午後の庭の追憶の甘さに放心して——

じつと、むせぶほどの夾竹桃の花の香をかいで居る。

［やぶちゃん注：昭和九（一九三四）年二月二十八日第五高等学校龍南会発行『龍南』二二七号に所載された初出形（発行日は「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により確認）。底本は「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像「227-007.pdf」を視認、活字に起こした。行間の有意な空きはママである。「思い出」「たわむれ」はママ。

沖積舎版はこの行空きを無視し、しかも最終連の最後の二行を一続きにしているため、かなり見た目の印象が異なるので、特に別に掲げる。

＊

## 追　憶

大きな夾竹桃（きょうちくとう）のある幼ない思い出の庭、

私はその土蔵の壁に橙色（だいだい）のクレオンで素晴らしい船の画を描いた。

橙色の二本の煙突からチロチロとはき出される橙色の煙、
橙色の鷗（かもめ）がはたはたと飛び交う橙色の波頭。
ああ午後の庭は目の痛い程明るい――。

遠くから来る響きのように私はスクリューの音を感じて居る。
あれは今日も夾竹桃の花をゆるがす風の音ででもあろうか。
今土蔵を前にしてクレオンを握って居るのは幼ない日の私である。
橙色の鷗のひそけきはばたき――遠い追憶の翼のそれ。
甲板をゆききする大男の船長の錆（さ）びたる靴のひびき、
マストに坐る小さな船員のあの異国めいた発音よ。
白い大洋への白き陽の光のたわむれ――さざめく潮の匂いもして、
私は遠い遠い昔の事を長い水脈のように知り始めて居る。

私は裏庭の土蔵の壁画に、
再びクレオンを握りしめて長い長い水脈をかきそえる。
そうして明るい午後の庭の追憶の甘さに放心して――じっと、むせぶほどの夾竹桃の花の香をかいで居る。

*

ルビの「だいだい」は「橙色」の二字に振られている。それはそれでよいとは思う。悪くないとは思う。思うが、初出にはルビはない以上、そう編者が振った根拠は奈辺にあるのかは知りたくはある、とは言っておく。寧ろ、私は二箇所の「水脈」の方が気になる。沖積舎全集の編者は、これを「すいみゃく」と読ませるつもりなのか？　これは意味から間違いなく絶対に「みを（みお）」である。当たり前だからだ、というか？！　だったら、「きょうちくとう」も「かもめ」も「錆びたる」の「さ」もみんな、いらないだろ？！　と言いたいのである。

さても。私がもし朗読せよと言われ、この初出形と沖積舎版の上記のテクスト渡されとしたら、その朗読は全く違うものとなる。初出形は朗読時間が倍以上下手をすれば三倍に近く

なろうと思う。則ち、この初出形と、この沖積舎版は、全く異なった詩篇だと言っても私には差支えないように思われるのである。

私はこの一篇を偏愛する。そうして――偏愛し――朗読したくなるのは――初出形のみだ――と言い添えておく。」

# 創痍

文二甲二　梅崎春生

遠クニ海鳴リノ音ガ聞エル此ノ酒場ノ屋根ニハ、破レタ旗ガ夜風ニバタバタト歌ツタ。天井ノ低イ此ノ部屋ハ、酒ノ匂ヒ、莨ノ匂ヒト共ニ、磯ノ香ガ漂ツテ居ル。アア幾年海ニ住ミ、幾年海ニナズンダ水夫達ノ服ニ、カソケクモシミツイタウラ淋シイ海ノ匂ヒナノダ。酒場ノ女ガヒク手風琴ノ旋律ガ、ソノ中ニ和ヤカニムセンダ。人々ハ、ジンヲ、ウイスキーヲ、ウヲツカヲ、心愉シク飲ミナガラ、聲ヲ合セテ、或ヒハ船歌ヲ、或ヒハ戀歌ヲ歌ツタ。

私ハソノ時、ソノ一人トナリ、片隅ニ坐ツテ、或ヒハ眼ヲ上ゲテ壁ニ懸ツタ油繪ヲ眺メ、或ヒハ卓ノ上ノ酒壜ノレツテルヲ眺メル。手風琴ノ響キガ私ノ記憶ノ海ニ荒ンダ。シカシソレヲ、波頭ノヨウニ碎カウトスル私ナノダ。ソレハ小川ノヨウニ逃レテ行ク心ナノダ。水脈ヲ殘サナイ幽靈船ノ私ナノダ。私ノ四肢ハ、グラスノ脚ノヤウニ冷タカツタ。ソレ故私ハウイスキーヲツイデハ飲ンダ。ツイデハ飲ンダ。ツイデハ飲ンダ。

窓ニアル季節ノ花束ハ紅カツタ。ソレヨリモ水夫ノ銜ヘタパイプハモツト紅カツタ。ソレヨリモ彼等ガ合唱スル戀歌ハモツトモツト紅カツタ。時折、港ノ方カラハ、ボオ・ボオ・ボオ・ト汽笛ガ聞エテ來タ。彼方ニハ、水夫達ノナツカシイ生活ガアツタ。ソシテ此處ニモ、水夫タチノナツカシイ生活ガアツタ。ソレガ單調ナ繰返シデアツタニシロ、彼等ハ此ノ紅イ現實ヲ樂シム爲ニ、心ユクマデ飲ミ、心ユクマデ歌フノダ。

私ハグラスヲカザス。私ハソレヲ飲ミホス。私ハソレヲ卓ノ上ニ置ク。置キ忘レラレタ過去。モウ思ヒ出セナイ過去。ソノ爲ニイラダタシイ氣持モ、亦私ノ宿命故デアツタラウカ。

私ハタチ上ル。私ハ扉ヲ押ス。巷ハ死魚ノ如ク眠リ、木錬瓦ハ鱗ノ如ク光ツタ。私ノ足音ハ單調ナ堆積ニ過ギナイ。私ハモウ閲歴ノ足音ヲ聞ク事モシナイ。動キノ無イ瞳デ蹣跚タル私ノ足ドリヲ數ヘル。ソレ故巷ニハ、秋風ガ颯爽ト吹キ荒ンダ。

［やぶちゃん注：昭和九（一九三四）年六月二十八日第五高等学校龍南会発行『龍南』二二八号に所載された初出形（発行日は「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により確認）。底本は「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像「227-007.pdf」を視認、活字に起こした。一行字数を底本に一致させてある。この散文詩はちょっと特異で、句点（°）が実はかなり大きく（○）、第三段落の「ボオ・ボオ・ボオ・ト」の中黒（・）も（●）ほどでないにしても有意に大きい。

実は、沖積舎版には一つ大きな問題がある。

それは、編集者が、この一篇を他の散文詩と一行字数を同じ二十字に合わせてしまった結果、「私ハソノ時、ソノ一人トナリ」で始まる第二段落（第二連）と、「私ハタチ上ル」で始まる第三段落（第三連）が、改行されているようには見えなくなって、全体が五段落（五連）構成なのに、三段落（三連）から構成されているようにしか見えなくなってしまっているのである。これは、後々までも思いもかけない誤読を惹起させることにもなりかねないので、特に明記しておきたい。

さて、本詩篇には別な疑問がある。それは、通常行われるべき禁則処理が行われずに、行頭にデカい句点が二箇所も上っている点である。これは一つの可能性として、作者梅崎春生

或いは編者なりが、これは一続きの散文だということを、暗に示している可能性を示唆する。とすれば、奇妙な一行字数制限を排除して表示したものこそが本篇のあるべき姿であるとも言い得ることになる。そこでそれを試みに表示しておきたいのである（署名は省略した）。なお、沖積舎版のような見かけ上のテクストの誤読を避けるために、各段（各連）の間に一行空きを設けておいた。

*

# 創痍

遠クニ海鳴リノ音ガ聞エル此ノ酒場ノ屋根ニハ、破レタ旗ガ夜風ニバタバタト歌ツタ。天井ノ低イ此ノ部屋ハ、酒ノ匂ヒ、莨ノ匂ヒト共ニ、磯ノ香ガ漂ツテ居ル。アア幾年海ニ住ミ、幾年海ニナズンダ水夫達ノ服ニ、カソケクモシミツイタウラ淋シイ海ノ匂ヒナノダ。酒場ノ女ガヒク手風琴ノ旋律ガ、ソノ中ニ和ヤカニムセンダ。人々ハ、ジンヲ、ウイスキーヲ、ウヲツカヲ、心愉シク飲ミナガラ、聲ヲ合セテ、或ヒハ船歌ヲ、或ヒハ戀歌ヲ歌ツタ。

私ハソノ時、ソノ一人トナリ、片隅ニ坐ツテ、或ヒハ眼ヲ上ゲテ壁ニ懸ツタ油繪ヲ眺メ、或ヒハ卓ノ上ノ酒壜ノレツテルヲ眺メル。手風琴ノ響キガ私ノ記憶ノ海ニ荒ンダ。シカシソレヲ、波頭ノヨウニ碎カウトスル私ナノダ。ソレハ小川ノヨウニ逃レテ行ク心ナノダ。水脈ヲ殘サナイ幽靈船ノ私ナノダ。私ノ四肢ハ、グラスノ脚ノヤウニ冷タカツタ。ソレ故私ハウイスキーヲツイデハ飲ンダ。ツイデハ飲ンダ。ツイデハ飲ンダ。

窓ニアル季節ノ花束ハ紅カツタ。ソレヨリモ水夫ノ銜ヘタパイプハモツト紅カツタ。ソレヨリモ彼等ガ合唱スル戀歌ハモツトモツト紅カツタ。時折、港ノ方カラハ、ボオ・ボオ・ボオ・ト汽笛ガ聞エテ來タ。彼方ニハ、水夫達ノナツカシイ生活ガアツタ。ソシテ此處ニモ、水夫タチノナツカシイ生活ガアツタ。ソレガ單調ナ繰返シデアツタニシロ、彼等ハ此ノ紅イ現實ヲ樂シム爲ニ、心ユクマデ飲ミ、心ユクマデ歌フノダ。

私ハグラスヲカザス。私ハソレヲ飲ミホス。私ハソレヲ卓ノ上ニ置ク。置キ忘レラレタ過去。モウ思ヒ出セナイ過去。ソノ爲ニイラダタシイ氣持モ、亦私ノ宿命故デアツタラウカ。

私ハタチ上ル。私ハ扉ヲ押ス。巷ハ死魚ノ如ク眠リ、木錬瓦ハ鱗ノ如ク光ツタ。私ノ足音ハ單調ナ堆積ニ過ギナイ。私ハモウ閲歴ノ足音ヲ聞ク事モシナイ。動キノ無イ瞳デ蹣跚タル私ノ足ドリヲ數ヘル。ソレ故巷ニハ、秋風ガ颯爽ト吹キ荒ンダ。

＊

なお、最終段落（連）に出る「木錬瓦」は不詳。これは当て推量に過ぎないが、「もくれんぐわ（もくれんが）」と読む一語で、木と煉瓦を組み合わせた古い港湾倉庫などの建築物を指しているのではあるまいか？　識者の御教授を乞うものである。

「閲歴」は本熟語の原義であるところの、「時間が過ぎ去ること」の謂いであろう。

「蹣跚」老婆心乍ら、「まんさん」と読み、よろめき歩くさまの意。

なお、沖積舎版（現代仮名遣化された部分はそのまま示してある）には実に、

「莨（たばこ）」「和（なご）ヤカ」「壜（びん）」「荒（すさ）ンダ」「銜（くわ）エタ」「亦（また）」「巷（ちまた）」「鱗（うろこ）」「堆積（たいせき）」「蹣跚（まんさん）」「颯爽（さっそう）」

と十箇所ものルビを振るが、またしても「水脈」には振っていない。これやはり「みを」以外の何ものでもない。読み間違いのあり得ないつまらぬ字にルビを附すのはやめて、ここにのみ、

「みお」

のルビが振られるべきであると心得る。

また、この号には編集委員として梅崎春生が参加しており、その「編輯後記」には彼による記載がある。同じく「熊本大学学術リポジトリ」内の「228-013.pdf」を視認、活字に起こした（底本では「〇」の柱行の次以降は一字下げである。行空けはママ）。

＊

○創作の方は豫想以上に澤山集まりましたが、詩、歌、句は割に淋しく、特に短歌に於てその感を深くします。そうして期待して居た一年生の人達のものが少なかつたのは一寸物足りなく思はれます。

○詩は五篇。皆とりどりの味を見せて、割合に自由な感情を表現して居るやうに思へます。清永、江藤兩君の詩は、素直な感情を美しい言葉で表現してあつて、その點敬服に價するやうに感じられます。頁數の都合上割愛した二篇もそれぞれ捨て難い味を見せて居ました。無題と題する詩篇は着想は良いのですが、もつと感情を整理したらどうかと思はれます。午前七時とする詩篇は、何かしら清新なものが欠けて居て、もつと感情を飛躍させやうと勉めるべきだと言ふやうな感じを抱かせます。

○短歌一篇、此の一年生の歌人は、割合に良い味を持つて居るのですが、まだ物足りぬ何物かがあるやうです。おそらくは短歌に於いての經歷がまだ短い爲でせう。それ故次の作品が期待されます。

○俳句。三人の投稿者があつたのですが、何れも去年の龍南に比べるとずつとレベルが低いやうです。日方君のだけを拾ふ事が出來ました。上田先生は、良い所はあるが惜しい事には少し型が古いと批評して下さいました。

Oかう雑誌をこしらへて終ひますと、何より痛切に感じられるのは、龍南に批評家の出現です。新しい詩人、歌人、俳人と共に、新しい批評家もその出現を待望されるべきでせう。亦今の時は、その爲に龍南は頁を割く事を惜まないでせうから。

（梅　崎）

＊

当該号は、前述の「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」よりリンクで飛んで「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像のＰＤＦファイルで、総ての記事を見ることが出来る。去年までの同期同級（春生は落第）とはいえ、詩への批評は鋭く、春

生の抒情詩人と自覚したような気負いがいい意味で感じられる。因みに、巻頭投稿論文「耽美主義文學　英文學に於ける傳統の意義」の筆者「文三甲三　西郷信綱」とは後の上古文学者の彼である。春生の入学時の同級であった（この時には春生は三年進級に落第してズレている。しかしズレた先にも木下順二らがいた。何と、羨ましい！）。」

# 海

海が見える。蜩の鳴く道と、向日葵の咲く道とを通りぬけると、ああしんかんと迫つて來る海の蒼白い風貌。海が一つの水泡のやうに圓くて雲の往來をうつし、煙はきながら沖通る異國船の眞赤な船腹を沈めて居る。秋風が吹く。海邊のきびばたけも、今、ちぢれた茶色の羽根飾りを擧げ、ひそやかな凱歌をざわめく。君も見るか。海の一端がくづれて、あの胸ときめかす風との接吻を。君も讀むか。悠久の情熱を祕めた海の蒼白い一頁を。あの日日の金色の輝きをそのまま、砂丘に埋もれた貝殼は、私に話しかける。私は答へる。そう。海は故郷。苦しかつた旅の半生に、秋風は幾度か吹いた。その度毎に私は日記帳を灰色に塗りつぶした。雨風に黝ずみ汚れた笠を荷を、蒼空に弧線描いて投げ飛ばせ。此所はあてどない旅の終り。私の幼ない日のきれいな思ひ出は、あの白い砂丘に埋葬してある。鍬取ろう。鍬取つて、あのさらさらの砂掬つて、私自身を發掘しようと。

海が見える。輝く向日葵も首を垂れ、鳴きむせぶ蜩も聲をやめ、靜かな情熱の息吹の中に息絶えよ。ここ、感情は蒸發し、思想は昇華し、半生の閲歴は小石のやうに海底に沈む。目を上げよう。砂丘の彼方、ああ日を沈め、空をひたして、しんかんと海が迫つて來る。

［やぶちゃん注：昭和九（一九三四）年九月発行の『ロベリスク』に掲載された。梅崎春生、十九の夏の思い出である。この雑誌は当時の熊本五高の友人であった霜多正次（しもたせいじ　大正二（一九一三）年～平成一五（二〇〇三）年：後に左派小説家となった春生の盟友。日本共産党員でもあったが後に除籍された）と出した同人誌である。底本は昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊「梅崎春生全集」第七巻所収を参考にしたが、同詩篇は正字化され、歴史的仮名遣も現代仮名遣化されてしまっている。しかし、『龍南』の初出詩篇の中にそれを平然と投げ込むことは、私には到底許されべきことではないと感じた。そこで初出を確認は出来ないものの、より原型に近づけることが出来ると信じ、恣意的に漢字を正字化し、仮名遣を歴史的仮名遣に直した。少なくとも沖積舎版のそれよりも初出の雰囲気には近いはずで

ある。引用などに際しては、この私の注も附して、ここからの引用であることを忘れずに注記して戴きたい。よろしくお願い申し上げる。

底本（現代仮名遣の箇所はそのまま引いた）では、

「蜩（ひぐらし）」「向日葵（ひまわり）」「凱歌（がいか）」「黝（くろ）ずみ」「鍬（くわ）」の五箇所にルビが附されてあるが、**『龍南』掲載詩篇に準じて総て排除した。**敢えて言うなら、せいぜい「黝（くろ）ずみ」ぐらいでいいであろう（「黝」は通常は「あおぐろい」と訓ずることが多いからである）。

なお、本詩篇も沖積舎版には前の「創痍」と同じ、疑いがある。則ち、改行部が見かけ上、消えて見えている可能性である。その可能性は二箇所に認められる。則ち、一行最終マスで句点が打たれている二箇所で、それは沖積舎版の場合、「私の幼ない日のきれいな思ひ出は、あの白い砂丘に埋葬してある。」の箇所と、「ここ、感情は蒸發し、思想は昇華し、半生の閲歴は小石のように海底に沈む。」の箇所である。以下、その二箇所を試みに、改行し、段落の間を一行空けたものを示してみる。

＊

# 海

海が見える。蜩の鳴く道と、向日葵の咲く道とを通りぬけると、ああしんかんと迫つて來る海の蒼白い風貌。海が一つの水泡のやうに圓くて雲の往來をうつし、煙はきながら沖通る異國船の眞赤な船腹を沈めて居る。秋風が吹く。海邊のきびばたけも、今、ちぢれた茶色の羽根飾りを擧げ、ひそやかな凱歌をざわめく。君も見るか。海の一端がくづれて、あの胸ときめかす風との接吻を。君も讀むか。悠久の情熱を祕めた海の蒼白い一頁を。あの日日の金色の輝きをそのまま、砂丘に埋もれた貝殻は、私に話しかける。私は答へる。そう。海は故郷。苦しかつた旅の半生に、秋風は幾度か吹いた。その度毎に私は日記帳を灰色に塗りつぶした。雨風に黝ずみ汚れた笠を荷を、蒼空に弧線描いて投げ飛ばせ。此所はあてどない旅の終り。私の幼ない日のきれいな思ひ出は、あの白い砂丘に埋葬してある。

鍬取ろう。鍬取つて、あのさらさらの砂掬つて、私自身を發掘しようと。

海が見える。輝く向日葵も首を垂れ、鳴きむせぶ蜩も聲をやめ、靜かな情熱の息吹の中に息絶えよ。ここ、感情は蒸發し、思想は昇華し、半生の閲歴は小石のやうに海底に沈む。

目を上げよう。砂丘の彼方、ああ日を沈め、空をひたして、しんかんと海が迫つて來る。

＊

こうすると「鍬とろう」と「目を上げよう」という呼びかけが如何にも鮮烈に浮かび上がるように思われ、私はこの可能性が十分にあるように思ってはいる。初出誌が確認出来れば、それはただの私の妄想に終るかもしれないのだが。ともかくも、大方の御批判を俟つものではある。

そんな妄想をしてみたくなるくらい、この一篇は、若々しく、眩しいばかりの――少年の自分を砂丘から発掘しようとする鍬を持った青年である自分――という眩暈を催すような、妖しくも美しい、慄然たるハレーションの――砂のミラージュ――なのである。」

# 時雨

梅崎春生

薄明の道。落葉たたいて葬列のごと傷ましくも時雨が降つた。私は一人の旅人となり、すずかけの並木道に蹌踉と行き暮れた。さうして谷をわたり野をはしる時雨の姿に、も一度私の感光紙を用意した。三脚の上で、私はも一度私の視野を固定した。ああ、私の季節のアルバムに、かくも打煙る空白の蠟板。――――

いつの日か渡鳥のひとみして生きて居た少年の頃から、汪洋として時間の流れが空間にしぶいた。その流れよ、私は座標を失ひ、大虚の星座に位する一個の暗黒星であつた。軌道を外れ、絶望の光茫を放ちながら地平に落下する一個の流星であつた。

記憶の底で私は汽車となり、月夜の曠野を北に奔つた。季節の忍びやかな去來に、涙が多くなつた頃であつた。錆ついたナイフかざして空しく死を想ふ日があつた。さうして情熱を失つても猶生きて行かうと唇歪めて獨語する私であつた。

行き暮れて私は此處に時雨の音を聞いた。樂しみなき、苦しみなき、喜びなき、惱みなき、白い生活の映寫幕に、私の日記は空虚な影像となつて打ちふるえた。しかしその時、私の胸の中に打ちたてられて居た一つの洋館の、蔦茂る西の窓に、幾年古ぼけた洋燈があかあかと點つた。

さてこそ昨日まで足の下を白く流れて居た此の道が、蕭條たる時雨の中にくろぐろとその跡を絶つた。そうして蒼白い額して喪心する私の眼のコダツクに、かくも茫漠として薄明の風象が沈下して行つた。――

薄明の道。落葉たたいて葬列のごと傷ましくも時雨が降つた。私は一本のすずかけの木の下に、海盤車のやうに默然とすわつた。私は私の迷走神經の上を紙魚のやうに走り去る一つ

の戰慄を知つた。やがて私は聞くであらう。苔の花のやうに戰いて居た私の心臓が、轟然と音立てて青空の彼方に崩れる音を。

［やぶちゃん注：昭和九（一九三四）年十一月二十五日第五高等学校龍南会発行『龍南』二二九号に所載された初出形（発行日は「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により確認）。底本は「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像「229-006.pdf」を視認、活字に起こした。第四段落（第四連）の「映寫幕」は底本では「映射幕」であるが、映画のスクリーンをこうは書かない。春生の誤記か誤植であろうと思われ、読むにいらぬ躓きを起こすため、ここは昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊「梅崎春生全集」第七巻所収の同詩篇の「映写幕」により、かく補正した。同「打ちふるえた」はママ。第五段落（第五連）「そうして」はママ。

「蠟板」原義は、ローマ人の発明した、木や象牙で作った小さな板の表面に蠟を引いてスタイルス（stylus）という尖った棒状の筆記用具で蠟を掻き取って書く書写材（ノートやメモ帳として十八世紀末までヨーロッパで使用された）を指すが、ここは「感光紙」「三脚」「視野を固定」「アルバム」の語句から、春生は写真湿板、コロジオン・プロセス（Collodion process）のことを指しているのではないかと私は思う。ウィキの「写真湿版」によれば、「コロジオン湿板」或いは単に「湿板」とも称し、古い写真撮影で『用いられた感光材料の一種で、ヨウ化物を分散させたコロジオンを塗布した無色透明のガラス板を硝酸銀溶液に浸したものである。湿っているうちに撮影し、硫酸第一鉄溶液で現像し、シアン化カリウム溶液で定着してネガを得る』。一八五一年に『イギリスのフレデリック・スコット・アーチャー（Frederick Scott Archer）が発明した。露光時間が』五〜十五秒と短いこと、一枚の『ネガから何枚でもプリントできたことからダゲレオタイプ』（Daguerréotype（フランス語）：銀板写真のこと。一八三九年にフランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲール（名は彼の名由来）によって発明された世界初の写真技法。銀鍍金された銅板上にヨウ化銀を塗布することで感光性を付与して水銀蒸気によって写像を現像する技法。金属板の表面に直接像を焼

き付けるために複製不可能な一枚限りの写真となる。また、感光面から鑑賞するために左右反転画像となり、また、見る角度によってはポジ或いはネガ像になったりする。参照したサイト「アートスケープ」の「アートワード」の小原真史氏のこちらの記載によれば、『鏡のように魔術的な輝きを放つダゲレオタイプは「記憶をもった鏡」とも呼ばれ、主に肖像写真として欧米を中心に流通した。像が非常にデリケートなため、専用のケースや額に入れられ、指紋や外気に触れないように表面はガラスで保護されて鑑賞された』とある）『を駆逐したが、撮影直前にガラス板を濡らし、乾く前に現像する必要があるため、乾板の登場とともに市場から姿を消した』とある。

「汪洋」「わうやう（おうよう）」と読む。原義は、水量が豊富で水面が遠く広がっているさまで、そこから、広義にゆったりとしたさま、広々と大きいさまになるが、ここは時間の流れの空間への飛散浸透という特異な比喩で、原義の使用である。

「大虚」「太虚」とも書き、「たいきよ（たいきょ）」で、原義は古代中国の宇宙観に於ける宇宙の真の本体とされる「気（き）」の根元的な形態を指し、「気」が遍く散じて全一な空虚になっている状態を指すようであるがが、ここはそこから派生した広義の虚空・大空の謂いと採ってよかろう。

「洋燈」沖積舎版は「ランプ」とルビする（根拠は不明）。

「コダツク」世界で初めてロール・フィルム及びカラー・フィルムを発売したメーカー、イーストマン・コダック・カンパニー（Eastman Kodak Company）の通称社名と商標。写真や映画の代名詞としても一般に用いられた。ウィキの「コダック」によれば、一八八〇年（明治十三年相当）に『ジョージ・イーストマンによって写真乾板製造会社として創業』一八八八（明治二十一）年には『ジョージ・イーストマンが「コダック」の使用を開始。同時に「あなたはボタンを押すだけ、後はコダックが全部やります」という触れ込みで市場に参入』、一八九二年（明治二十五）年には『「イーストマン・コダック社」を設立』した。一九〇〇（明治三十三）年には。子供をターゲットとした、ロールフィルムを用いた「ブローニー」を一ドル『発売し、大衆に写真を一気に普及させた』。一九二一（大正十）年には、『シネコダックとして、小型映画の規格』「十六ミリ・フィルム」を発表、一九三二（昭和七）年には『「シネコダック8」として、のちに「ダブル8」と呼ばれる小型映画の規格を発表』していた。即ち、この「コダック」は「写真」ではなく「シネ・キャメラ」を指す換喩であ

ることが判る。さればここで春生の言う、「さてこそ昨日まで足の下を白く流れて居た此の道が、蕭條たる時雨の中にくろぐろとその跡を絶つた。そうして蒼白い額して喪心する私の眼のコダツクに、かくも茫漠として薄明の風象が沈下して行つた」の部分、いや、それ以前の映像も含めて（写真印象の強い初段（初連）を除いて――但し、これも写真機を持ち出す「私」を動画として写していると考えれば最初から、である――第二段落（第二連）以降のそれ、或いは少なくとも「映写幕」の出る前段（前連）とここ）、その総てのイメージが映画フィルムの映像として詩人によって確信犯で動画処理されているのだと読むべきことが判明すると言える。

「風象」聴き慣れぬ単語であるが、全時空間を含むところの、風景・形象、さらには詩人の心内に投射される全印象（イメージ）の謂いであろう。

「海盤車」「ひとで」と読む。棘皮動物門星形動物亜門 Asterozoa のヒトデ類である（中国の本草書以来の呼称であるが、これには中国でも日本でも古くから混乱があり、実際にはヒトデだけではなく、ウニ類のタコノマクラ・カシパン・ブンブク類、ヒトデ類ながらヒトデには見えない面妖なイソノテヅルモヅル類の呼称でもあるが、フリークの私がそれを語り出すと大脱線のエンドレスになるので、グッと我慢の私となることとする）。

「迷走神經」脳神経の一つで、副交感神経や咽頭・喉頭・食道上部の運動神経、腺の分泌神経などを含み、延髄を起点とする。脳神経でありながら、体内で多数に枝分れして複雑な経路をとって腹腔内にまで広く分布を持つことから、かく名が附せられた。内臓に多く分布していて体内の環境をコントロールしているが、強い痛みや精神的ショックなどが原因で迷走神経が著しく刺激されると同神経系が過剰に反応し、心拍数及び血圧低下や脳貧血などを惹き起こして失神などの症状を呈する（以上は看護師求人転職サイト「看護 roo!（カンゴルー）」の「看護用語集」にある「迷走神経」を参考にした）。但し、春生は単にこの「迷走」という呼称に惹かれ――多分に神経症的な感じで――体内の隠れた隅々のあらゆる感覚へ瞬時に伝わる神経系統を漠然とイメージしているように思われる。

「紙魚」老婆心乍ら、「しみ」と読む。本を食うとされた昆虫綱シミ目 Thysanura に属するシミ（紙魚）類に擬えた和訳である。シミ類は、やや偏平で細長い涙滴形形状や体表面に銀色の鱗片が一面に並んでいる点、そして古くから本を食害すると思われていたことから「紙魚」と書かれる（英語では「silverfish」）。人家に生息する種は確かに障子や本・和紙の

表面を舐めるように食害はするものの、目立った食痕は残さない。実際に書物に縦横のトンネル状の孔をあけて食い荒らすのは、鞘翅目多食亜目ナガシンクイ上科シバンムシ科 Anobiidae に属するシバンムシ（死番虫）類である（以上は概ねウィキの「シミ目」に拠った。因みに、気になる方のために。ウィキの「シバンムシ」によれば、和名「死番虫」は『死の番人を意味するが、これは英名の death-watch beetle に由来する。ヨーロッパ産の木材食のマダラシバンムシ』属 *Xestobium* 『の成虫は、頭部を家屋の建材の柱などに打ち付けて「カチ・カチ・カチ……」と発音して雌雄間の交信を行うが、これを死神が持つ死の秒読みの時計、すなわち death-watch の音とする迷信があり、先述の英名の由来となった』とある）。なお、ここで春生が「私は私の迷走神經の上を紙魚のやうに走り去る一つの戰慄を知つた」と言っているのは病跡学的には非常に興味深いと私は思っている（なお、シミ類はまさに神経に入り込んで素早く走りそうに見える実際の形態と生態を持つことは事実ではあるから、この比喩対象自身は奇異ではない）――奇体な魚のような形をした奇体な「虫」が神経を走って逆（さか）撫でする――のである。「虫」を幻視するのは精神疾患としてはオーソドックスなもので、知られる一般的なものでは、統合失調症や常習的な酒の過飲によるアルコール依存症及びそれが進行したアルコール性精神病にしばしば見られ、春生の遺作「幻化」の主人公久住五郎も虫幻視の症状に苦しめられている。後年の梅崎春生自身にも実際の症状としてあったものと考えてよく、ここは詩のイメージに過ぎないものの、十九歳当時のイメージの中にこうした精神的な違和感が実際にあった可能性も排除は出来ないからである。

なお、この号も梅崎春生が編集人として参加している。彼の「編輯後記」についても、同じく「熊本大学学術リポジトリ」内の「229-024.pdf」を視認、活字に起こす。

＊

詩、歌、俳句は、その選を上田先生にお願ひして、掲載の諸篇を選び出すことが出來ました。上田先生に深く感謝致します。併せて投稿された諸兄の勞を多とし、且つ將來の精進を期待するものです。　（梅崎）

＊

今までもそうなのであるが、本誌の掲載作品は五高の教授らによって選ばれて掲載されてきたものである。さればこそ、梅崎春生も自身の詩がずっと載り続けていることへの抒情詩人然とした自負心は当然の如く、あったのである。なお、「上田教授」というのは、別入手の資料からは、当時の英語担当であった上田良吉教授のことと思われる。」

# 春

文二甲二　梅　崎　春　生

南の窓に日ざしがあかるくて、季節が遠く近く佇んでゐる。くちなわのやうに、はらわたのやうに、あちらへ行く道が、こちらに通ずるみちが、しろい。破風をひととき雲雀がはねをやすめ、陽炎はあかがねの瓦よりたちのぼつて、俺は、今感覺の絶壁におる。おびただしい光箭にまみれて、さんらんと加速度の中にある。

［やぶちゃん注：昭和一〇（一九三五）年二月二十三日第五高等学校龍南会発行『龍南』二三〇号に所載された初出形（発行日は「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により確認）。梅崎春生満二十歳になった直後である（彼の誕生日は大正四（一九一五）年二月十五日）。底本は「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像「230-005.pdf」を視認、活字に起こした。「くちなわ」「おる」はママ。「おびただしい光箭にまみれて」の部分は底本では「おびただしい光箭にたまみれて」となっているが、これでは「たまみれて」意味が通じないばかりでなく、画像を見ると、そのために一行字数が前行までの二十四字を越えて「る。」が下にはみ出て見苦しくなっている。この「た」は衍字と断じ、沖積舎版に倣って上記のように訂した。

「破風」老婆心乍ら、「はふ」と読む。屋根の切妻にある合掌形の装飾板又はそれに囲まれた三角形の構造部分を指す。

「光箭」「くわうせん（こうせん）」と読む。光りの矢。

これも奇妙な一行字数配置を変更して繋げた方が読み易い。以下に示す（署名は省略した）。

＊

春

南の窓に日ざしがあかるくて、季節が遠く近く佇んでゐる。くちなわのやうに、はらわたのやうに、あちらへ行く道が、こちらに通ずるみちが、しろい。破風をひととき雲雀がはねをやすめ、陽炎はあかがねの瓦よりたちのぼつて、俺は、今感覺の絶壁におる。おびただしい光箭にまみれて、さんらんと加速度の中にある。

＊

なお、この号も梅崎春生が編集人として参加している。彼の「編輯後記」についても、同じく「熊本大学学術リポジトリ」内の「230-012.pdf」を視認、活字に起こす。

＊

○

學年末のゆゑであらうか、原稿の集りかたが非常にすくなくこれほどの雑誌をこしらへるのにすら、ずいぶん骨が折れた。一般龍南人がどれほど（龍南）に冷淡であるかを知るにつけ、そこばくの感慨もあるが、ことさらに目を閉ぢ、ことさらに耳を押へて、馬車うまのやうに、狭い角度をだけ望み見ようとする人々の心情が、なほにがにがしく私の心を打つのだ。ことに中央の文藝復興の余波を受けて、前へ出ようとした氣運が、このやうにみじめに霜枯れてしまはうとは、まこと私の豫期しないところであつた。

○

たとひこのたびが此のやうな有様であるにしろ、この次のときは元瓶のゐる原稿の堆積を、ここで期待しておかう。部屋に積まれるそのたびの原稿が、かくも少ない時、それはどんなにさむざむとした風景であるか。しかもそれから一冊を作り上げねばならぬ我々の苦

しさを、原稿過多に悩むよそがたの高校に思ひあはせて、しみじみとわびしい氣がする。

○

いたづらなくりごとは止めておくが、今度、一篇映畫に關する論文があつたのは（龍南）近來になかつた現象で、これはまことにこころ愉しく思はれる。映畫には緣遠い熊本とは言へ、このやうな眞面目な研究も出て良い筈だ。とくに筆者が理科生であることは、前回の園田君の論文とも考へあはせて、遠くからの光をのぞむ心地であつた。

○

春の光が空に明るい、このやうにすなほに（龍南）を成長させたい。おほらかな匂ひとたぎる情熱とをこめて、若々しい（龍南）を成長させたいと思ふ。　（梅崎）

＊

文中の「中央の文藝復興の余波」というのは、なかなか意味深長で、恐らくはプロレタリア文学運動への弾圧と転向文学の流行を揶揄しているようにも見える。「映畫に關する論文」は本号『龍南』巻頭の理二甲二の小笠原到氏の論文「映畫鑑賞についての一考察　忘れられたカメラマン」を指し（リンク先は同ＰＤＦ。以下、同じ）、後の「前回の園田君の論文」は前の第二二九号『龍南』の園田正明氏の科学論文「陽電子（Positron）に就て」を指す。但し、後者は映画論文ではなく、理科の学生からの学術論文投稿であることを指しているので注意されたい。それにしても、ここで春生が映画を問題にしている辺り、前号の「時雨」の詩作意図に美事にフィード・バックしているではないか（この少し前の新感覚派が映像的表現を盛んに採り入れていたことを思い出させる）。「編輯後記」の最後のパートも、明らかに自身のこの詩篇に掛けて述べており、原稿の少なさをぼやき、諸氏に叱咤しつつ、全体になかなか気骨ある頼もしい編者の言葉となっている。」

# 空虚なる展望

梅崎春生

こゝろ疼く薄暮のひととき、むれ立つ木々の梢に、風がひとしきりいんいんととゞろきわたる。こゝ巷をはなれた動物園の、徑ばかりながながとのたくる荒涼の風景。身風景のひとつとなり、おびただしい落葉の腐敗する音を感じながら、いまは年老いた一匹の獅子のものうげに目を閉ぢ、たてがみを垂れて、遠い日の、かきけされた夢を見てをる。

うち仰ぐ虚空に、つねにおもひはいたみ、古りゆくきのふけふに、またひとつの銘碑をたてようと、白く舞ひおちる時間と必死の格闘をつゞける。はるかなる徑をひとりたどる老園丁のかすれ果てししわぶきよ。自由を慕ひもとめる幽囚の鴉のあのきれぎれのうたよ。年老いた獅子は、いくたび鉛の如き幽鬱の眸あげ、年輪のごとくうちかさねし壯麗なる跫音をかぞへかへしたことであらう。

かつて空わたる季節の下に、南國の原野を君臨したその日々を、よりに近く青白い夕昏が降りそそぐころほひ、くしくも想ひおこしては、ひえびえと、あかがねのとびらに絶望の翳をなげるであらうが。

時計にも似た心象の、ねぢを長いこと捲き忘れ、遠く「死」の時間を指す長針短針の幽かなるふるえ。獅子は眸をつむる。ひごと、心なき鴉や狼どもに、水と食物をくばりあるく老園丁への類推に、ああ、荒涼の風景にをる自らのみじめさに、あふれ出る熱い涙を意識して。

積木のごとくうづたかい時間の堆積。獅子は心ひそかにひめかくす
日記帳をひらく。耳に痛い風のおとよ。激しい雲脚にも似ていらだ
つ心をおししづめながら、錆びついた鋼鐵のペンをとり、空白なる
今日の頁になすりつける。亦いくたび繰り返した文句であらう。
〝我にいまいちどの、はるかなる展望をゆるせ〟と。

［やぶちゃん注：昭和一〇（一九三五）年六月十五日第五高等学校龍南会発行『龍南』二三一号に所載された初出形（発行日は「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により確認。そこには梅崎春生の項には『文三甲二』とある）。底本は「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像「231-003.pdf」を視認、活字に起こした。底本では第三連の末「あかがねのとびらに絶望の翳をなげるであらうが」の後には句点がないが、次の行が、前後に比して二倍の行空きになっていることから、敢えて句点を禁足せずに次の行に上げ、行間は一行分とした（この禁則破りは既に詩篇「創痍」で行われているからでもある）。なお、沖積舎版では最終連の最終行が改行されてはいるものの、行頭から始まっているのであるが、底本は表記通り、三字下げとなっている。従えない。第四連の「ふるえ」はママ。

「動物園」これは恐らく、現在、熊本市東区健軍にある熊本市動植物園であろう。但し、この当時は水前寺成趣園（通称、水前寺公園。現在の熊本市中央区にある）の東側にあった。開園は昭和四（一九二九）年七月で敷地面積九千九百平方メートルであった（二年後には更に二千平方メートル拡張）。参照したウィキの「熊本市動植物園」によれば、この後の昭和一八（一九四三）年には、『第二次世界大戦の戦況悪化に伴い、空襲時に猛獣が脱出する恐れがあったため』、翌年までに『トラ・ライオン・クマ・ヒョウ・オオカミなど猛獣に該当する動物』九種一五頭を『殺処分した。ニシキヘビ、カバ、ゾウは職員らの主張により殺処分を免れたが、カバは栄養失調により死亡し、ニシキヘビは凍死した。なお、ワニは冬眠中

だったため軍部に存在を隠したことにより、終戦まで生き延びた』とあり、また、昭和二〇（一九四五）年三月三十一日には大日本帝国陸軍第六師団による接収を受けて閉園させられ、四月二十七日には『軍の食糧とするためにゾウのエリーが感電死させられた』とある（下線やぶちゃん。後の二箇所の下線は私の怒りの下線である）。戦後、昭和二二（一九四七）年十月になってやっと再開園し、昭和四四（一九六九）年に現在の江津湖畔へ移転している。

「夕昏」春生の好みからは「たそがれ」と訓じているように思われる。

第三連の「よ／りに近く青白い夕昏が降りそそぐころほひ、」はママ。この「に」は沖積舎版では除かれている。「に」は確かに衍字とは思われるのであるが、除去すると字数が減り、一行字数を合わせた見た目のバランスがひどく悪くなるので、特異的に残した（以下で除去ヴァージョンを示す）。

これも奇妙な一行字数配置を変更して繋げた方が読み易く、前掲の句点の観点からも以下にそう加工したものを示す。署名は省略し、前注通り、衍字と思われる「に」を除去した。

*

# 空虚なる展望

こゝろ疼く薄暮のひととき、むれ立つ木々の梢に、風がひとしきりいんいんととゞろきわたる。こゝ巷をはなれた動物園の、徑ばかりながながとのたくる荒涼の風景。身風景のひとつとなり、おびただしい落葉の腐敗する音を感じながら、いまは年老いた一匹の獅子のものうげに目を閉ぢ、たてがみを垂れて、遠い日の、かきけされた夢を見てをる。

うち仰ぐ虚空に、つねにおもひはいたみ、古りゆくきのふけふに、またひとつの銘碑をたてようと、白く舞ひおちる時間と必死の格闘をつゞける。はるかなる徑をひとりたどる老園丁のかすれ果てししわぶきよ。自由を慕ひもとめる幽囚の鴉のあのきれぎれのうたよ。年老いた獅子は、いくたび鉛の如き幽鬱の眸あげ、年輪のごとくうちかさねし壯麗なる跫音をかぞへかへしたことであらう。

かつて空わたる季節の下に、南國の原野を君臨したその日々を、より近く青白い夕昏が降りそそぐころほひ、くしくも想ひおこしては、ひえびえと、あかがねのとびらに絶望の翳をなげるであらうが。

時計にも似た心象の、ねぢを長いこと捲き忘れ、遠く「死」の時間を指す長針短針の幽かなるふるえ。獅子は眸をつむる。ひごと、心なき鴉や狼どもに、水と食物をくばりあるく老園丁への類推に、ああ、荒涼の風景にをる自らのみじめさに、あふれ出る熱い涙を意識して。

*

なお、この号も梅崎春生が編集人として参加している。彼の「編輯後記」についても、同じく「熊本大学学術リポジトリ」内の「231-019.pdf」を視認、活字に起こしておく。

*

◇阿部が死んだ事は部に取つても　相當な痛手であつた。三學期あたり、からだをずいぶん無理して使つて居たやうであつたが、まさか、かう言ふ事になるとは思ひもしなかつた。阿部の家に行つて遺稿でもと聞いてみたら、まだ故人の机とか書柵とかは整理して居ないから、そんなものがあるかたいかも判らないと言ふ返事であつた。

◇なほ、生前、阿部は、五高に文學研究會を作りたい意向を私に示すことがしばしばで可成綿密な具体案をもこしらへて居たやうであるが、それもお流れになつたのは殘念である。誰か一年二年あたりで、さうした事に興味を持つ人は、ひとつやつて見たらどうだらうか。私は、もう一年足らずで去り行く（筈の）身であるから、どうともしやうもないが、一年二年あたりまだ先長いことだから、そんなものをつくつて、その方面の修業に務めるの面も白からうと思ふ。

◇投稿の中、阿部の追悼の文が一篇あつて、一讀胸をうつ眞情にあふれたものであつたが、雜誌の性質上掲載を見合した。惡しからず。

◇今度は、私も奮發して、創作を一つ作つたのだが、部長の意見で發表を差し控へること

とした。そのため、大きな穴が出來て非常に難儀したので、發行がこのやうにおくれた。之もひとへに私の不明からで、この點諸兄に御詫したい。

◇私の話について。

何か批評を聞きたい。惡意から出た批評でない限り喜こんで受け入れもしやうし、反ばくもしやう。これは何の私も話ばかりではなく「龍南」に最も必要なのは批評家なのだ。一學期は批評會が開かれるかどうかもわからないが、開けたら、その方面に興味持つ人は來てほしい。

◇文學ほど非生産的なものはないとか、そんな考へを持つて居る人が、まだ龍南に居るやうだ。そんな人の生活が果して生産的であるかと言ふに、さうではなくて、やはり非生産的な生活をして居る。一体、此のやうな精神的な事業が生産的とか非生産的とかそのやうな尺度ではかれるかどうか考へなほして見るがいい。

◇最後に投稿者諸兄の健康をいのる。　（梅崎）

＊

第一条の「阿部が死んだ事は部に取つても　相當な痛手であつた」の空隙はママ。この「阿部」という人物、前号二三〇号の『龍南』の編集委員の一人に「阿部」と名乗る者が参加しており、同号に『文一甲一　阿部辰生』の署名の小説（『龍南』内では「創作」と呼ぶ）「無事」（同前ＰＤＦファイル。以下同じ）、その前の二二九号に『阿部辰生』の署名で小説「嫉く」が載るが、二三〇号の後には一年生で編集委員を勤めたにも拘わらず、『龍南』への投稿が全くないことから、この人物がこの「阿部」である可能性が強いように思われる。第三条は『龍南』に厳しい編集内規が存在することが窺われる。第四条は春生に「地図」（昭和一一（一九三六）年六月同人誌『寄港地』発表）以前に幻の小説習作が存在したことを意味している。或いは、この「地図」の原型ででもあったのかも知れないが、今となっては謎である。第五条の「受け入れもしやうし、」は底本では「受け入れもしやし、」であるが、脱字と断じて特異的に訂して示した。」

［やぶちゃん注：次の『龍南』第二三二号（昭和一〇（一九三五）年十二月十五日発行）には彼の作品は載らない。しかし、その『編輯後記』に彼の記載部分があり、それによってこの号が編集人としての梅崎春生の『龍南』最後の仕事であったことが判る。されば、ここに特に、同じく「熊本大学学術リポジトリ」内の「232-025.pdf」を視認、活字に起こして挟みおくこととする。底本では「○」を附した柱行の次は総て一字下げである。

＊

◇

○われわれの最後の所産として、龍南２３２號をおくる。いまよかあとは、われわれのよき後続部隊が、いまにもまして元氣で進軍ラッパを吹きつづけて呉れることだらう。龍南文藝復興もまぢかにちがひない。ともあれ、われわれは、ここに最後のピリオドを打つ。

○詩歌句。いままでにない多數の投稿があつた。まことに喜ぶべき現象である。上田先生のは御批評は、都合上、當選作のそれのみを錄することにした。當選にもれた作の批評部室に保管されてゐること故、もし聞きたい人があれば來て頂きたい。

○私の意見を概して言へば、此度の投稿に限らず、いつもさうであるが、龍南の詩歌句には、意欲が貧しい。小感情の完成をもとめ、逃避、感傷のうたをうたふことにこころざしはすれ、絶望の中から立ち上る強烈な意思を、疾風の中にひるまぬ決然たる風貌をうたひでるものは、まことに寥々たるものである。あらゆる文藝作品の底にのたうつものは、常に叛逆の精神でなければならぬ。われわれはまだ若いではないか。それ故われわれは野心的でなければならぬ。白く鮮やかなスタートラインを引け。末梢的な感性をとぎすますのを止め、巨大な鱶の如く牙をむいて、大いなるものへの待機の姿勢を取れ。

○一年二年の新しい人たちにかはつて、われわれ舊人は龍南をおし出される。龍南生活もさして短くはなかつたが、何一つ足跡もこさす立ち去ることは淋しい。せめで来るべきひとびとの努力幸福をいのつておかう。

（梅崎）

*

老婆心乍ら、第三条の「寥々たる」は「れうれう（りょうりょう）たる」と読み、ここは原義の「もの寂しいさま」ではなく、具体に「数の少ないさま」を示す形容動詞である。梅崎春生二十最後の宣言である。」

# 詩「斷　層」

梅崎春生

ゆきずりの男も女も、濡れたしきいしにあしあとをのこし、凍りかかつた舗道の上にあしあとをのこし（たとへばくだものや。歪んだ鏡面に二重にうつるなし、りんご、ばなな、ぱいなつぷるが、きちがひじみた不調和を氾濫させ、赤い襟つけたくだものやのむすめは着ぶくれて、はれた手の甲を小火鉢のとぼしい炭にかざし）みせにならべたりんごのひとつが、行客の袖にかかつて、ころころと、しめつた土間にころげ落ちる。こよひ、にぶい灯はわびしい巷にたちならび、雑音騒音はまちのすみずみからわやわやわやとたち、男も女もうつけた顔貌のはしばしにまでただれた神經の尖端をぶらぶらさせて、犬のようにあへぎながらあるく。くだものや。ほんや。ごふくや。そばや。かずかずの醜悪なる生活の斷層。その生活の論理を一歩もふみはづさないやうにあえぎながら。歳末の街を、いたましいほど苦しさうにあえぎながら。（そのこころからこころへわなのごとくはりわたされたるあひ言葉。ここにすすけたる町人根性。——今日も無事の日が暮れよと。）

があがあとらじおがそらなりをし學生等は下駄をはいて町かどをまがり（もつものはうつろなる誇りとかなしいほどまずしい思想と牡犬のような春情）肌さす十二月の風がはたはたとまんとの裾をひるがへす。（めんめんとつらなりむせぶ習俗のうた）巷よ。ほんやにたかる只讀みのむれ。店員の油斷をうかがふ萬引常習女。くだものをねぎるわかいおとこと。ああ、ここでも鎧のやうに厚い習俗の壁をつきやぶり、ただいちどでいいからあの新鮮なひかりをみちびきいれるひとびとはいないのか。社會なべに冷酷な目をそそぎながら歳末の人出は小便のやうにながながとつづいてゐる。（めがねをかけたみにくい女士官の顔にかがやきわたるいやしむべき誇りの表情

よ）

入口が暗い小さな喫茶店の扉を肩でおして出入するおとこたち。冷たいかほでかれらを送迎する喫茶店のわかいをんなのうるんだひとみ。隅のぼつくすには肩はばひろい街のごろつきたちが、すとおぶのまわりにはにきびをもてあましたやうな學生たちが（かれらは政治の將來をかたり）機關銃のごとき亢奮をおしかくし何氣なく煙草を吸ひながら（かれらは哲學の動向をかたり）相手への嫉妬と反感に燃えたつて（かれらは文學の貧困をかたり）喫茶店のおんなのゆたかなこしをぬすみみる。おのれへのただひとたびの媚笑をいまかいまかとまちこがるる ―― そのひととき。 舌は煙草と珈琲とではぶらしのやうに爛れはてて（をんなは蓄音器の針を代へながら、痛みだしたる子宮の疾患にあえぐ）

そのひとときよ。巷の温度は急速に下降しはじめるのだ。（商店のどくどくしい廣告ばかりが妖しく風をはらみ）ゆききがたえ、白き舗道にゆききがたえる。（ただちらほらとあゆむものはえものさがす街の狼とかえりをいそぐ支那そばや。ああ、ちやるめらで十二月のそらにふきならすかなしげな生活のうた）やけのやんぱちに醉つぱらつたいくたりのをとこらが、ぽすたあをはがし電柱をたたきあるひは凍つたみちにすつてんころりんところがりながら、きちがひじみた聲をはりあげて（どんがらがんどんがらがんとうたふのだよ涙を流してうたふのだよ。どんがらがんどんがらがんと）

劫初より末世まで吹きすさむ巨大なる颶風。巷はその颶風の眼になり、一歩一歩するどく虚無へよろめくのだ。その顚落をわづかにささへる一枚のうすい壁を（そのうすいかべをつたって學生等はかへつてゆく。耳にのこる勘定の白銅のうすらさむいおと）凍つたしき

いしに下駄のおとがからころとひびき、つめたい空風のなかで下駄のおとがからころとひびき（つきがでてゐる。猛獣の口のごとく血のいろでいつぱいとなり、銀行の鐵扉をふるへさせると）電柱はなみだをたれ電線はなみだをたれ、巷はこのまま死滅のみやこだ。巷よ。その町角をその並木をその舗道を、ひろびろと金魚のごとく泳ぎわけそらにむかつてむなしく咆哮するもの。水銀柱は零下八度をしめし、そのまま、そのまま巷は觸手の方向を失ふ。

［やぶちゃん注：昭和一一（一九三六）年二月十五日第五高等学校龍南会発行『龍南』二三三号に所載された初出形（発行日は「熊本大学附属図書館」公式サイト内の「龍南会雑誌目次」により確認。そこには梅崎春生の項には『文三甲二』とある）。底本は「熊本大学学術リポジトリ」内の同初出誌誌面画像「233-009.pdf」を視認、活字に起こした。因みに、この発行日附は梅崎春生の満二十一歳の誕生日当日である。これを以って『龍南』所収の詩篇は終わっている。第三連七行目の「おんな」はママ。同九行目「いまかとまちこがるる ― ― そのひととき。 舌は煙草と珈琲とで」は字数が有意に少ないが、底本では下部の「煙草と珈琲とで」の字間が有意に広げられて、前後と一致させてある。本電子化ではそれでは上手くゆかないので前の方の記号類の前後で調節した。また、「いくたりのをとこらが」の部分は底本では「いくたりのをところが」であるが、これでは意味が解からない。「をとこら」の誤植と断じて、特異的に訂した。沖積舎版も「おとこらが」となっている。沖積舎版では第四連末部分の「どんがらがんどんがらがんとうたふのだよ」の後には句点が打たれてある。確かに行の最終マスであり、その可能性がすこぶる高いとは思うが、梅崎春生の意志に沿うかどうかは判別がつかないので、ママとした（但し、後の表記替えでは挿入してはみた）。最終連の「咆哮」の「哮」の字の部分は底本では「口」＋「幸」という字である。この漢字はユニコードにもなく、大修館「廣漢和辭典」にも載らない。意味からみても「咆哮」しか考えられず、このような植字活字が存在したこと自体が驚異であるが、誤植と断じて「咆哮」

とした。沖積舎版もそうなっている。

第二連末部分に「女士官」と出るが、旧大日本帝国兵役法の第一条には「帝國臣民タル男子ハ本法ノ定ムル所ニ依リ兵役ニ服ス」とあって女性には徴兵資格はなかった。しかし、従軍看護婦の婦長クラスは下士官相当待遇だったはずである、というQ&Aサイトの回答にあるので、ここはそれととっておく。

以下、最終連の「劫初」は老婆心乍ら、「ごふしよ（ごうしょ）」（古くは「こふしよ（こうしよ）とも読んだ）と読み、仏教用語で「この世の初め」の謂い。

「颶風」「ぐふう」と読み、強く激しい風の謂いである（古い気象上の学術用語としては熱帯低気圧（台風）や温帯低気圧に伴う暴風をも限定的に指すことがある）。

「白銅」当時流通していた純粋な白銅貨は古い順に「五銭白銅貨幣（菊）」「五銭白銅貨幣（稲）」「五銭白銅貨幣（大型）」「十銭白銅貨幣」「五銭白銅貨幣（小型）」があるがこの中で可能性があるのは「五銭白銅貨幣（小型）」か。「白銅」は銅とニッケルの合金であるが、実は昭和八（一九三三）年からニッケル製の「十銭ニッケル貨幣」「五銭ニッケル貨幣」が流通しており、このシーンで「白銅」とは呼んでいるものの、この「五銭ニッケル貨幣」の可能性が実は高いかも知れない（私は古銭に冥いので、ここはウィキの「日本の補助貨幣」を参考にした）。

これも奇妙な一行字数配置を変更して繋げた方が読み易く、そう加工したものを示す。『龍南』の総標題と思われる『詩』と題名の鍵括弧及び署名は省略し、前注通り、第四連末部分の「どんがらがんどんがらがんとうたふのだよ」の後には句点を打った。また、第三連七行目の「おんな」を「をんな」に訂し、同九行目「いまかとまちこがるる ―― そのひとと き。 舌は煙草と珈琲とで」の奇妙な字間調整も除去した。

*

# 斷　層

ゆきずりの男も女も、濡れたしきいしにあしあとをのこし、凍りかかつた舗道の上にあしあとをのこし（たとへばくだものや。歪んだ鏡面に二重にうつるなし、りんご、ばなな、ぱいなつぷるが、きちがひじみた不調和を氾濫させ、赤い襟つけたくだものやのむすめは着ぶくれて、はれた手の甲を小火鉢のとぼしい炭にかざし）みせにならべたりんごのひとつが、行客の袖にかかつて、ころころと、しめつた土間にころげ落ちる。こよひ、にぶい灯はわびしい巷にたちならび、雑音騒音はまちのすみずみからわやわやわやとたち、男も女もうつけた顔貌のはしばしにまでただれた神經の尖端をぶらぶらさせて、犬のようにあへぎながらあるく。くだものや。ほんや。ごふくや。そばや。かずかずの醜悪なる生活の斷層。その生活の論理を一歩もふみはづさないやうにあえぎながら。歳末の街を、いたましいほど苦しさうにあえぎながら。（そのこころからこころへわなのごとくはりわたされたるあひ言葉。ここにすすけたる町人根性。――今日も無事の日が暮れよと。）

があがあとらじおがそらなりをし學生等は下駄をはいて町かどをまがり（もつものはうつろなる誇りとかなしいほどまずしい思想と牡犬のような春情）肌さす十二月の風がはたはたとまんとの裾をひるがへす。（めんめんとつらなりむせぶ習俗のうた）巷よ。ほんやにたかる只讀みのむれ。店員の油斷をうかがふ萬引常習女。くだものをねぎるわかいおとこと。ああ、ここでも鎧のやうに厚い習俗の壁をつきやぶり、ただいちどでいいからあの新鮮なひかりをみちびきいれるひとびとはいないのか。社會なべに冷酷な目をそそぎながら歳末の人出は小便のやうにながながとつづいてゐる。（めがねをかけたみにくい女士官の顔にかがやきわたるいやしむべき誇りの表情よ）

入口が暗い小さな喫茶店の扉を肩でおして出入するおとこたち。冷たいかほでかれらを送迎する喫茶店のわかいをんなのうるんだひとみ。隅のぼつくすには肩はばひろい街のごろつきたちが、すとおぶのまわりにはにきびをもてあましたやうな學生たちが（かれらは政治の將來をかたり）機關銃のごとき亢奮をおしかくし何氣なく煙草を吸ひながら（かれらは哲學の動向をかたり）相手への嫉妬と反感に燃えたつて（かれらは文學の貧困をかたり）喫茶店のをんなのゆたかなこしをぬすみみる。おのれへのただひとたびの媚笑をいまかいまかとまちこがるる――そのひととき。舌は煙草と珈琲とではぶらしのやうに爛れはてて（をん

なは蓄音器の針を代へながら、痛みだしたる子宮の疾患にあえぐ）

そのひとときよ。巷の温度は急速に下降しはじめるのだ。（商店のどくどくしい廣告ばかりが妖しく風をはらみ）ゆききがたえ、白き舗道にゆききがたえる。（ただちらほらとあゆむものはえものさがす街の狼とかえりをいそぐ支那そばや。ああ、ちやるめらで十二月のそらにふきならすかなしげな生活のうた）やけのやんぱちに醉つぱらつたいくたりのをとこらが、ぽすたあをはがし電柱をたたきあるひは凍つたみちにすつてんころりんところがりながら、きちがひじみた聲をはりあげて（どんがらがんどんがらがんとうたふのだよ。涙を流してうたふのだよ。どんがらがんどんがらがんと）

劫初より末世まで吹きすさむ巨大なる颶風。巷はその颶風の眼になり、一歩一歩するどく虚無へよろめくのだ。その顚落をわづかにささへる一枚のうすい壁を（そのうすいかべをつたって學生等はかへつてゆく。耳にのこる勘定の白銅のうすらさむいおと）凍つたしきいしに下駄のおとがからころとひびき、つめたい空風のなかで下駄のおとがからころとひびき（つきがでてゐる。猛獸の口のごとく血のいろでいつぱいとなり、銀行の鐵扉をふるへさせると）電柱はなみだをたれ電線はなみだをたれ、巷はこのまま死滅のみやこだ。巷よ。その町角をその並木をその舗道を、ひろびろと金魚のごとく泳ぎわけそらにむかつてむなしく咆哮するもの。水銀柱は零下八度をしめし、そのまま、そのまま巷は觸手の方向を失ふ。

*

梅崎春生はこの号が出た翌三月にこの熊本第五高等学校を目出度く（二年次落第留年で通算四年在校）卒業、四月には東京帝国大学文学部国文科に入学している。

なお、同号の『編輯後記』（同前「233-012.pdf」）の前田氏（『龍南』の次号第二三四号の目次と編集後記から『文三甲二』の『前田可博』なる人物と判る）の記載に、例によって応募作の少ないことを歎き、『殊に詩、短歌、俳句の如き』は、『もつと自由な氣持で』どんどん『應募されていゝ筈』、『もつと豁遠』（かつゐん（かつえん）：広く遙かに開けているさま）『な氣持で』どんどん『應募されていゝ筈』、『もつと』もつと『大膽に』『發表してもいゝ

筈』と訴えた末尾に、

＊

龍南詩壇に大きな足跡を殘して梅崎君が去る。梅崎君の去つたあとの龍南詩壇の淋しさを想うふ時にこんなことを考へる、こんなことを願つたりする

＊

とある。また、同じ編集員の尾越氏（この『龍南』第二三三号の春生の本「斷層」の前に載る「玩具の家（スケッチ風の戯曲）」という戯曲の作者尾越孝人（所属不明）であろう）は、やはりこの『編輯後記』の一節で、

＊

梅崎氏の詩は貧しい中にも［やぶちゃん注：投稿が、の謂いである。］誇つていゝ收獲だつた。が、君が去ることを思へば今後の龍南詩壇は如何？　飛入でも何でも歡迎する。誰か自信のある人は？　ビツテ！

＊

とあって、抒情詩人の春生の名声が、少なくとも『龍南』内ではいや高かったことがよく判る。なお、「ビツテ！」はドイツ語の副詞「Bitte!」（ビッテ！）で、「さあ！　どうぞ！」の謂い。以上、彼はこれと戯曲や『編輯後記』の書き振りからみて、五高文科の乙類（ドイツ語選択）であると推定される。］

# 秋の歌

秋は忍び女のように

跫音(あしおと)を　しのばせて　やってくる

つくつく法師の　あの細い四肢から
捨てられた　扇の骨から――
白磁の器物の朝の冷え
口に溶ける　氷菓のしたたり

（積乱雲は　西の空に　ゆらゆらと立ち騰(のぼ)っているのだが　天は哀しいほど高く　そして
淡いのだ）

跫音をしのばせてはいるけれど
ぼくらには　しかし　わかるのだ
忍んで来る女を待つように
ぼくらは耳を立て
お前のほのぼのとした訪れを
聞きとろうとする

おかあさんの　しなびた乳房
唐もろこしを　焼くにおい

死にかかった蛇を逆さにぶらさげて
子供達は町をゆく
色褪(あ)せた麦わら帽をかむって

秋は許されぬ恋人のように
身をひそめてやってくる

［やぶちゃん注：底本は昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊「梅崎春生全集」第七巻を用いた。同底本解題によれば、梅崎春生の死（昭和四〇（一九六五）年七月十九日）の翌年の昭和四一（一九六六）年三月号『文芸』に載ったものとある。また、同解題には、『「秋の歌」から「誓文」までの五篇は、梅崎春生の没後に「〈未発表〉戯詩文七編」と題して、八匠衆一の「解説」を添えて「文芸」に掲載されたものである。これらは梅崎春生が赤坂書店の編集者であったころ、同社の「社中日記」とでもいうべき二冊の薄い大学ノートに書きとめておいたものであ』るとする。彼が赤坂書房編集部に勤務したのは、底本全集別巻の年譜によれば、昭和二一（一九四六）年の三月から十二月までであることが判っている（以下、「誓文」まではこの注を略す）。「八匠衆一」（はっしょうしゅういち　大正六（一九一七）年～平成一六（二〇〇四）年）は作家。本名は松尾一光、北海道旭川市生まれで、日本大学芸術科卒。名古屋の同人誌『作家』に「未決囚」を発表、昭和三〇（一九五五）年、直木賞候補となる。昭和三三（一九五八）年に「地宴」で作家賞（作家社発行の雑誌『作家』に発表された作品の内、一年間を通じて最も優れたものに贈られた。この当時は同人のみが対象であった）、昭和五七（一九八二）年に作品集「生命盡きる日」で平林たい子文学賞受賞している。梅崎春生と親しかった（以上はウィキの「八匠衆一」他に拠る）。春生三十一歳、なお、山崎恵津さんとの結婚はこの翌年の一月である。］

# 三十二歳

三十二歳になったというのに

まだ　こんなことをしている

二畳の部屋に　寝起きして
小説を書くなどと力んでいるが
ろくな文章も書けないくせに
年若い新進作家の悪口ばかり云っている

女房も持てない　甲斐性なしだから
外食券食堂でぼそぼそと飯を噛み
夕暮　帰ってくると　不潔な涙を瞼にためて
窓から　空を見上げてぼんやりしている

時には　やり切れなくなって
アルコールなどをうまそうに啜(すす)り
揚句のはてに酩酊(めいてい)し
裸になって　おどったりする

ゴヤやドーミエだって
こんな惨めな男は　描かなかった

雑巾(ぞうきん)にでもなって　生れてくれれば　よかったのに
人間に生れて来たばかりに
三十二歳となったと言うのに
おれはまだ　こんなことをしている

［やぶちゃん注：底本や初出その他は、前の「秋の歌」の私の冒頭注を参照のこと。三十二歳とあるが、これがリンク先に示した通り、赤坂書店編集部勤務期（昭和二一（一九四六）年の三月から十二月まで）に書かれたものとすれば、これは数えであって、当時の春生は満では三十一である。詩中に「女房も持てない　甲斐性なしだから」とあり、「秋の歌」で注した通り、山崎恵津さんとの結婚はこの昭和二二（一九四七）年の一月であるから、これは間違いなく数えの「三十二歳」である。］

## 鴉

身体に合わない　黒いマントを羽織っているが

皮膚病にでもかかったような　汚ない足が出てるじゃないか

何故くちばしを　そのように意地悪く曲げるのだね

誰も見ていないと
墓場のあたりをうろうろして
素早く人の腐肉を　つついたりする

死にかかった人の匂いを　抜け目なくかぎつけて
屋根の上に伊達者(だてしゃ)らしく気取って
いやな啼(な)き声を立てたりする

だから　誰も　お前と遊んでやらない
時に　夕陽にむかって　飛び立って
かなしそうに　啼いて　みせても
ああまたお前かと　皆眼を背(そむ)けてしまう

悲しげな目をして
お前は　どこに飛んでゆくのだね

おれも一しょに飛んで行こう
黒いマントを　借して呉れ

［やぶちゃん注：底本や初出その他は、前の「秋の歌」の私の冒頭注を参照のこと。**第五連冒頭の「だから」は実は底本では「たから」となっている。これでは読めないので、梅崎春生**

の誤字か、沖積舎版の誤植かは不明ながら（解題には注も何もない）、特異的に訂した。］

# 己を語る

※

好きなもの　酩酊　無為

嫌いなもの　　子供　人混み　病気

※

及ばずながら、今まで文学を捨てずに私が生きて来たのは、私の内にひそむ過大な自恃の心のせいである。

自分が Selected few であるという意識が、私の文学からの逸脱を支えつづけてくれた。

※

ある人々我を目して図太しという。あるいは然らん。

※

私が人に強制したり忠告したりしないのは、自分が人からそうされたくないからだ。

※

自分が俗物であるという意識、どんな背徳無惨なことでもやれるという気持、これほど私を力づけてくれるものはない。

※

新宿旭町など、そのような陰惨な巷で、食事をしたり、あるいたりすることに限りない喜びを感じる。昨日は、そこで煙草（キンシ）十本七円五十銭で買い、その中二本を別の男に一円五十銭でうった。

［やぶちゃん注：底本や初出その他は、前の「秋の歌」の私の冒頭注を参照のこと。

「Selected few」は「選ばれた少数」の謂い。

「新宿旭町」現在の新宿四丁目の旧称。正確には「四谷旭町」。戦後は所謂、ドヤ街であった。

「煙草（キンシ）十本七円五十銭」「（キンシ）」はルビではなく、まるまる本文である。知られた安煙草ながら愛煙されている「ゴールデンバット」（Golden Bat）のこと。ウィキの「ゴールデンバット」によれば、太平洋戦争前後の昭和一五（一九四〇）年から戦後の昭

和二四（一九四九）年までは、『「ゴールデンバット」という名称が敵性語とされたため、神武天皇の神話に基づいた「金鵄（きんし）」に名称変更された』（「日本書紀」に後に初代天皇となる神武天皇が長髄彦（ながすねひこ）と戦った折り、金色の霊鵄（れいし）（神霊の変じた鳶（とび）。タカ目タカ科トビ属トビ *Milvus migrans*）が天皇の弓に止まると、その体から発する光で長髄彦の軍兵たちの目が眩み、天皇軍が勝利することが出来たとされ、これを「金鵄」と呼んだ。ここはウィキの「金鵄」に拠った）。『戦争中にタバコ類の大幅な値上げがおこなわれると、それを題材にした唱歌「紀元二千六百年」の替え歌が作られたが、その冒頭は』「金鵄あがつて十五銭」であったとある。調べてみると、この昭和二一（一九四六）年当時の十本入り「ゴールデンバット」の定価は一円、翌年でも二円五十銭であるが、恐らくは品薄であったに違いなく、闇値は驚くべき高額であったのであろう。」

# 誓　文（戯文）

創作「サーカス」百八十枚、九月末日までに完成いたすべく、もし違約の節は人中にてお

笑い下されたく候。八月十九日（梅崎春生）

広告

創作「サーカス」は、百八十枚の力作にて、記憶を喪失せる復員兵士と、サーカスの踊子との悲恋を主軸となし、敗戦下における世相がさまざまにそれにからむ、前人未踏の雄篇にして、世界文学史上何人も到達し得ざりし最高の境地を目指し、著者は毎日スイトンをたべ、蚊に悩まされ、しかも二畳の部屋に炎暑に苦しみつつ刻苦、骨身をけずりつつあり。

ドストエフスキーをして赤面させる大傑作、御期待を乞う。

サーカス

朱裏の外套を羽織り
小さな火鉢に手をかざしていたが
ひじのくぼみにうっすりと垢をのせ
それゆえ　お前の腕は　いっそう　清潔に見えた

おれは金がないから
木戸を通れずに
表に佇んで　眺めていたが
大天幕の中からは　どよめきと拍手が

（アトは此の次）

綴方

キノフハ　ハイセンキネンビトイフノデ　赤坂シヨテンノ人タチガ　タクサンアツマツテキマシタ。オオトバイノ匂ヒノスル水ニ紅チヤヲマゼ　ソレカラ　スシダノサラダダノ

イロンナゴチソウヲコシラヘテ　ノンデヰマシタ。女ノ人タチガカヘツテカラ〇〇サントイフ人ガドウイフツモリカ着モノヲヌギステ　マツパダカニナリマシタラ　江口サントイフ人モマツパダカニナリマシタ。オトナノ人ノマツパダカヲミルノハ　ナンダカグロテスクデシタ。ミンナヨツパラツテ　ウタヲウタツタリオドツタリシマシタ。

キノフセンセイガ　日本ハ四トウ国ニナツタト　オツシヤツタケレド　コノエンカイヲミルト　ハツキリソノコトガワカルヤウナキガシマシタ。

評　たいへんよく出来ました。もう少し努力すれば豊田正子位にはいけませう。

――昨日は、松尾君の部屋に坐ってゐたら、隣室にて同居人が姉妹喧嘩をハジめる。だんだん言ひつのって、泣声や肉体を打つ音。何か云ひかけて、それが嗚咽となり、号泣となって行く声。だまって聞いてゐるうち、焼火バシでさし通すやうな肉情が、身内を貫くのを私は感じた。私は呻きながら、掌で耳朶を押へてゐたが――禁欲も久しきかな？

［やぶちゃん注：底本や初出その他は、前の「秋の歌」の私の冒頭注を参照されたいが、実は底本には詩篇「サーカス」までしか載らない。以下の二篇は何故か（理由不明）、解題に記されている。ここではそれらを後に並べたが、原ノートの順序はこうではない可能性が高いものと思われる。行空けは私の判断で行った。

「サーカス」に相当する梅崎春生の小説は存在しないように思われる。

解題には後の二篇については、『本巻に収録しなかった戯文二篇』とし、『カナづかいはもとのまま』という注記が前についている。また、「綴方」の後には、『末尾の評も梅崎春生が書いたもので、文中の江口さんというのは、同社の編集長で詩人の江口榛一のことである』と注記がある。江口榛一（えぐちしんいち）（大正三（一九一四）年～昭和五四（一九七九）年）は詩人で社会運動家。ウィキの「江口榛一」によれば、大分県生まれで、本名は新一。明治大学文芸科卒で、当初は教師や新聞記者を務めていたが、戦後、聖書の啓示を受けて詩作を行い、雑誌『素

直』（これは梅崎春生の「桜島」の初出誌である）の編集長を経、昭和二九（一九五四）年に「近所合壁」（『新潮』の同年五月号）で第三十一回芥川賞の候補となった。翌年、受洗するも、既成の教会に飽きたらず、昭和三二（一九五七）年には『困っている人が自由になかの金を取って使うことを目指した』募金活動「地の塩の箱運動」を起こしたが、二年後に縊死自殺している。娘の江口木綿子（ゆうこ）さんによって「地の塩の箱連盟」として遺志が現在も続けられている（「地の塩の箱運動」につおては北尾トロ公式サイト「全力でスローボールを投げる」の「昭和の根っこをつかまえに」の『第3回「地の塩の箱」の巻』に拠った）。

「豊田正子」（とよだまさこ　大正一一（一九二二）年～平成（二〇一〇）年）は随筆家・小説家。昭和一二（一九三七）年、東京葛飾区渋江小学校在学中に綴った生活記録が「綴方教室」として刊行されてベストセラーとなった。昭和二五（一九五〇）年には左派の小説家江馬修（しゅう／なかし　明治二二（一八八九）年～昭和五〇（一九七五）年：中華人民共和国では最も有名な日本人作家の一人であったが、晩年は殆んど黙殺された）らとともに『人民文学』を創刊（後に江馬と同棲するが、絵馬には女性遍歴癖があり、その後、捨てられている）、昭和三九（一九六四）年には実母を描いた長編「おゆき」を発表、昭和六一（一九八六）年に「花の別れ」で日本エッセイスト・クラブ賞を受けて居る（以上は事典その他の複数資料を参考にした）。」

# 烏賊干場風景

おれは青い海を見にきたのに
どうやらここにはないらしい

砂丘につらなる無数の干場を
歯ぐき色の潮風は吹きわたり
渚(なぎさ)にはたれもいやしない
低い家家はみんな半戸をおろし
ちぎれた漁旗がとおくで鳴っている
それにしても
かくもおびただしい磔刑(たくけい)の群
たくさんの不運な烏賊(いか)どもが
軟体を竹串でつらぬかれ
先ず眼玉からそのまますこしずつ乾いてゆく
脚をちりぢりちぢませて
するめになりかけたのもすこしはいる
なんというにおいだろう　これは
やくざな蠅のように眼をぐるぐるさせて
おれは干場干場をわたってあるく

生乾きで半透明の膜になった
烏賊たちの飴色の胴なかを
海が
水銀のように重たく
かなしく　くらく
ゆらゆらゆらゆら揺れていて
おれが見たのは
ただそれだけ

［やぶちゃん注：底本は昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊「梅崎春生全集」第七巻を用いた。同底本解題によれば、昭和二四（一九四九）年一月号『文芸時代』に掲載されたものである。春生三十四歳で、この年の三月には単行本『桜島』を月曜書房より再刊している（初版は前年昭和二十三年三月大地書房刊）。

この景色は後の「幻化」を直ちに想起させるが、寧ろこれは、梅崎春生自身が桜島の海軍基地に転任となった際、枕崎で管見した原風景に、それ以前の吹上浜（「砂丘」とある）の記憶が混成されて創り上げられた幻影なのではあるまいか？　とすれば――冒頭の「おれは青い海を見にきた」という「青い海」とは「桜島」冒頭や後の「幻化」の――あの坊津の風景――なのではあるまいか？］

# 藪野直史編　梅崎春生全詩集　完

（ワード縦書第一版二〇一六年二月二十三日発行）

やぶちゃんの電子テクスト集：小説・戯曲・評論・随筆・短歌篇へ